

1. はじめに

(1) 先の戦争に負けてよかった？

戦争は国家と国家の主権や国益を巡る終極の争いでもある。戦争に敗ければ、莫大な生命財産と時間を犠牲にしながらも、一時的にでも或いは永久に主権は失われ国家としての体を為さないか国家が消滅することすらある。だが最近手にした書物(単行本)に、居た堪れない思いを抱き、筆を執る事にした。この単行本はこれまで学んで居ない領域の内容が豊富に収められており、是非とも学びたいと思って購入した書物である。確かに「財政・金融面から国を考える貴重な資料的価値を有する素晴らしい書き物」であると高く評価したい。ところが、略半分程を読み進んだページに遭遇して、著者は何を言いたいのであろうかと「慮る」気持ちに成り何度その部分を読み直した事か。その部分とは、第1に「とんでもない被害をもたらしたにもかかわらず先の戦争には負けて良かったという人が多い。……戦争に負けて、なぜ良かったかと言えば、敗戦が軍部の暴走による経済的な負け戦の状況に終止符を打ったという面が大きかった。……戦争に負けて、なぜ良かったことと言えば、さきの戦争では基本的に賠償が求められず、財政的に見れば我が国にとって負け戦ではなかったことも大きかった。……」(「持たざる国への道」-あの戦争と大日本帝国の破綻-・中公文庫)。というだけの部分である。因みに、著者は1952年生まれで、経歴も学歴も素晴らしく、現在でも国家運営に関わっている財務官僚のトップ的立場の高級官僚である。以下は、著者の真意を捉える事が出来ないまま論を進める事と成る事をご容赦頂きたい。

(2) 部分否定(肯定)と全否定(肯定)について

残念ながら完成されていない人間には、物事を評価する場合には『陥穽』が待ち構えている。最も得意とする分野で肯定したり、否定してみても、それがあたかも『全部の肯定であったり、否定であったり』と勘違いしたり、錯覚したりする場合は少なくない。これは謙虚に未完成な人間が認めるべき過ちである。例えば、『部分肯定(否定)を以て全部を肯定(否定)しまう』という事などは、典型的な例ではなかろうか。そこでその『陥穽』に陥らないために、「何を最高の価値(又は善)」として位置付けるのかが問われるのである。これに照らし合わせる事によって過ちを遠ざける智慧が生まれるのではなかろうか。学問には人間学と時務学がある事も学んだが、当然両者は両輪である。子供の躾や教育の在り方等においては時代時代に応じた表面的な手法や理屈は変わるだろう。だが、戦争は、例えば教育だけで論じることは出来ない、経済や金融だけで論じる事も出来ない。国家の主権や民族の名誉まで賭けた『死生存亡の道』(孫子)なのである。決して、『戦争に負けてよかった』と軽々に云って欲しくない。敢えて言うならば、是ほどの傲慢はないのではなかろうか。

確かに、我が国は経済大国には成ったが、現在の日本人は世界に向けて民族としての誇りを、『自ら論じて相手に納得させる』気概と実力を持ち合わせているか？ 外国から言わ

れ無き侮辱を受けてもその誤りを説き伏せようとする勇気を持ち合わせているのか？を問いたい。

2. 国の安全保障上我々が追い求めるべき最高善とは？

(1) マーズローの個人欲求と国民の欲求

マーズローの人間の欲求段階は度々姿を現す。これは国家ではなく、個々人の欲求について論じたものであると思うが参考に成る。様々な表し方が為されているようであるが、* 欠乏の欲求(生理的欲求・安全の欲求・所属の欲求・承認の欲求など)、* 存在の欲求、及び* 自己超越の欲求等とも言われる。それでも、存在欲求を満たされた者は1%止まりとも言われ、自己超越の欲求を満たされた者はせいぜい2%だとも言われる。個人レベルにおいて敗戦をシンプルに考えれば、敗戦の影響をどの様に受けたかで変わるだろう。損得勘定で考えれば損した側と得した側に分かれるかもしれない。所謂内地や外地で育ち、親を失い、財産も没収され、着の身着のまま引き揚げた組、戦後のシステム改革などで新たに財産を得た組、失った組、身分を失った組、新たに得た組など様々であろう。国家にしてみれば、政治戦・外交戦・武力戦・経済戦・情報戦等に敗れ、主権を失って占領下に置かれた先の大東亜戦争は、正に総力戦であり、軍の暴走を許したのも国民である。そして原爆投下や東京空襲をはじめとする無差別空襲等も、戦勝国の論理で裁かれた極東軍事裁判の例などは裁判の体を為さないまま、約1000名に近い人達が刑場の露と消えた。勝てば官軍であり、負ければ賊軍である。そして、我々の先輩達は、『こんなに悪い事をした』として刷り込まれた自虐史観が国民に深く浸み込んだ。

(2) 敗れても復興できる道

「代表的な日本人」を著した内村鑑三の言葉に、「戦いは敗れ、国は削られ、国民の意気鎮沈し、なにごとにも手のつかざるときに、かかるときに国民の真の価値(ネウチ)は判明するのであります。戦勝国の戦後の経営はどんなつまらない政治家にもできます、国威宣揚にもなう事業の発展はどんなつまらない実業家にもできます。難しいのは敗戦国の戦後の経営であります。国運衰退のときにおける事業の発展であります。戦いに敗れて精神に敗れない民が真に偉大なる民雄であります」。その**第1**は敗戦必ずしも不幸に非ざること。国の興亡は戦争の勝敗にはよらない。「善き宗教、善き道徳、善き精神」があれば国は戦争に負けても衰えない。**第2**に天然(自然)(開発できる国土や太陽・海の波・火山等の利用できるエネルギー)の無限の生産力がある。これをしっかりと「開発する」こと。**第3**に国の実力は軍隊ではない、軍艦ではない、金でも銀でもない、「信仰の実力」である。(デンマーク国の話・内村鑑三・岩波文庫より)と述べている。だが『戦争に敗れて良かった』という事ではない。敗れても善き道徳や善き精神を取り戻す事が重要であることを教えている。

(3) 戦争は最高善をも失い事を知るべきだ

正に国家総力戦であった大東亜戦争では、経済や金融は重要なファクターであったし、今後も変わることは無いだろう。我が国は政治戦・外交戦に敗れ、利に非ずして動き、得るに

非ざりて兵を用い、已む無く、武力戦に突入して敗れた。そして一時的(約7年間)にはあるが主権を失い、その間の占領政策によって形而上の多くを失い、未だに取り戻していない。即ち、最高善を取り戻していないからこそ、近隣諸国からは言われ無き歴史観を押し付けられ、長い間謝り続けてきた。そして、国内では経済的な繁栄により国は富み、国民は豊かさを得た一方では、殺人の半数は係累によるものと言った醜態を演じている。又、基本的人権の行きつく所には、青天井の安全要求、公共の福祉に反することも平気で自己主張し、個人の権利を追求する姿は日常的である。更には、言論の自由を標榜しつつ、国益まで害するような言動が一般国民のみならず政治家の中にも生まれている。それでも、「先の戦争に負けてよかった」のだろうか。

つまり、部分的な評価ではその様な表現が出来るのかも知れないが、断りが無い限りは全体評価として受け取るのが自然ではないだろうか。だからこそ、(戦争と言った)この様な分野の評価を下す場合には、国家にとって、国民にとって、民族にとって『最高価値・最高善』は何かを新たにしてこれに当てはめた評価がなされる必要がある。日清・日露の戦争期には江戸の日本に生まれ育ち又はその様な親に育てられた明治人が政治や軍事のトップを占めたが、大東亜戦争期には明治維新後「時務学」を重視した専門性に裏付けられたトップリーダー達が占めた。とは言え、戦前までは歴史や修身等国民共通に人間学を強く求めた教育にはそれなりの(最高)価値が有った。だが戦後の教育では時務学が余りにも優先して行われ、基本が『等閑(ナオザリ)』にされてきたのではないだろうか。

(3) 孫子の戦争観

孫子は、その冒頭で「兵とは国の大事なり、死生の地、存亡の道、察せざる可からざるなり」と説く。更に「利に非ざれば動かず、得るに非ざれば用いず」、更には「戦勝攻取してその功を修めざるは凶なり」等と述べるが、正に戦いが国益を目的として行われるものだとはっきり述べている。更に戦わずして勝つために平時から五事即ち「道・天・地・将・法」を整えて、「彼我を比べて何れが整っているかを深く考察せよ」と述べている。その比較の要素を「主・将・天地・法令・兵衆・士卒・賞罰」の七計を挙げているが、約2500年前の春秋・戦国時代を背景にしている兵書であることを考えれば、これを現代に当てはめる場合には、何も五事七計(五つや七つ)だけである必要はないだろう。クラウゼヴィッツは戦争論に於いて「軍事は政治に従属するものであり、戦争とは外交の延長である」とも述べている。

3. 「持てる国」と「持たざる国」、果して我が国はどちらだろうか。

我が国はどちらの国に属するのであろうか。(持たざる国への道の)著者は、2. 26事件が有った「1936年頃の日本は、『その当時の日本の勢いというものは産業も着々と興り、防衛機では世界を圧倒する。…英国を始め合衆国ですら悲鳴を上げている。…この調子をもう5年か8年続けて行ったら日本は名実ともに世界第一等国に成れる。…だから今下手に戦などを始めてはいかぬ』状況にあった」という「宇垣一成」陸軍大将の回想(宇垣一成日記)を引用し、「その様に好調だった日本経済は2. 26事件の翌年に起った盧溝橋事件(1

937年)以降、日中紛争が泥沼化するに従って行き詰っていった。生活の窮乏化は英米のブロック経済が『持たざる国』である我が国を追い込んだためと受け止められた。その点は今日もそう信じている向きが多いが、2. 26事件当時に『英国を始め合衆国ですら悲鳴をあげている』とされたほどに繁栄していた我が国が突然『持たざる国』になって窮乏化していったわけではない。経済原理を理解しない軍部が満州経営や経済的な負け戦と成った華北経営が我が国を国際的な孤立の中で、じり貧に追い込んでいき、その結果『持たざる国』に成ってしまったのである。と論じておられる。勿論、誤りではないと思う。しかし、或る一面から見れば正しい事も、違う面から見れば首をひねりたくなることだって多々ある。我が国が日中間の戦を経ながら疲弊して行ったことには納得できる。だが果たして日本はどちらの国だろうか。何を以て「持てる国」と云い「持たざる国」と云うのか。敗戦後我が国は驚異的に経済的な復興を果した。それは著者の述べる如く、勤勉なる国民が居たからである。そして人以外に資源を有しない我が国は懸命に成って働いた。原料を輸入して之を物や技術にした貿易で成り立ってきた国である。

現在に日本も似たり寄ったりだろう。2. 26事件当時との比較で言えば正に当時の様な繁栄の時期に在るのだろう。そしてその繁栄を維持して行くためには「下手に戦(イクサ)などしてはならない」という事もその通りである。だが当時と異なる大きな要素に『軍部』等と云うのは比較に成らないほどかけ離れている。だからこそ、政治力や経済合理性を大事にすると共にもてる軍事力を合理的に駆使できる態勢(体制)を整えて、戦を未然に防止することが重要である。敗戦の責任を軍部に押し付けてきたのは戦後の歴史観でもある。そうであるならば、挙って日本国民がそうさせたのである。政治・経済・教育等の各界が軍をコントロール出来なかったという事に成る。だが、敗戦に至る過程で軍部でも様々な努力をしてきたのも事実であるが、結局は日本悪玉論・軍部悪玉論・陸軍悪玉論を以て全責任を擦り付けてきた感がしてならない。古来の伝統や文化を強調したり、国旗や国歌を語ったり、愛国心等を口にすると「軍国主義(復活)」とか「極右化」とか短絡的な返事が返ってくる。その様な国は二つの国しかないのである。否、我が国を含めて三つかも知れない。否、他の国にも、歪められた宣伝戦に乗せられて、それを信じている人達もいるようだ。

4. 軍部も「持たざる国」を自覚していた

(1) 統帥綱領の理念の変遷

帝国陸軍高級統帥の拠り所と成っていた用兵思想に『統帥綱領』がある。我が国の用兵思想が具体化への端緒は、1873年(明治6)にフランスに範をとった「歩兵操典」からである。1889年(明治22)には野外要務令草案が出来、1901年(明治34)に海戦要務令の原版ができた。だが、日露戦争までは大兵団を動かす統帥に当っての規則や心得など拠り所となる公的なマニュアル等は無く、戦争の哲学書らしいものが生まれたのは帝国陸軍の『統帥綱領』であろう。1913年(大正2)フランスの「大兵団統帥綱領」が配布されたが、翌年の1914年(大正3)にはドイツに範をとったのが『統帥綱領』が正式に制定された。本綱領はドイツ陸

軍の上級指揮官のマニュアルを参考にしたものであるが、機密扱いされた日本陸軍の『戦争指導の書』として扱われ、1918年・1921年・1928の3回に亘り改訂され、更には1943年に改定草案が作られたが制定されないまま、終戦まで上級指揮官様に活かされた。制定当初の綱領及び第一次・第二次改訂版までは、第一次世界大戦の戦訓を取り入れた戦争遂行における兵站・政治外交・科学戦等の重要性が含まれていた。だが改訂を重ねるに従い(1928年版からは)兵站の項目が消え、作戦指導の項目の中で論じられるようになった。『統帥とは方向を示し、後方(兵站補給)を準備することである』とする大原則が、何時しか後方軽視へと変わって行った。(変遷の根源に「持たざる国」の宿命を覚える次第である)

(2) 統制派と皇道派

2. 26事件までは陸軍の主流を占めた『皇道派』を中心として、「持たざる国」はいくら頑張ってみても、「持てる国」に物量や国力を凌駕出来ない、特に長期戦になれば勝ち目はない。従って、「その様な国と戦う大戦争には参加してはならない、速戦即決、寡を以て衆を撃てるような敵との戦争に限定すべきだ」という考えが主流となった。だが、筆者が言われる様に本来戦う必要のなかった米国との戦争に突入したのである。

将に、第1次世界大戦の独ソ戦における「タンネンベルヒの殲滅戦」(二度と無かった様な大殲滅戦)は、都合の良い戦例となり、逐次精神的要素が物的威力を凌駕するような、寡を以て衆を制すると言った「持たざる国」の宿命からか物量戦や科学戦と言った新時代の戦い方の常識からは後退してしまい、この延長線に「戦陣訓」等が制定されている。

この間、永田鉄山、石原莞爾、鈴木貞一などの「持たざる国」を(日米戦争を以て世界最終戦争となる日米戦不可避と言った考えから)「持てる国」に近づけるための統制的な経済発展政策によって効率的な経済発展を遂げる(それまでは米国とは戦争しない:1970年代までは日米戦っては成らないという石原莞爾の最終戦争論)と言う『統制派』によって国家総動員政策が進められたが、永田鉄山は刃に斃れ、石原莞爾は第一線から退けられ、同じ『統制派』の東条英機に引き継がれた形で大東亜戦争へ突入した。

(3) 明治憲法の問題

加えて明治憲法の「国务大臣責任制」や「統帥権の独立」の弊害が、輔弼・輔翼・副署・協賛などと言った、『君臨すれども統治せず』、『しらす』等、政府・陸海軍・議会などに対する天皇の大権は実質的に集約されなかった。特に「陸海軍の二元統帥」を生み、総理大臣である東条英機首相でさえ、陸海軍の統帥には口を出せず、陸軍大臣を兼務しても海軍には口を出せないというのが東条政権の実態であった。このため、総動員体制を進める東条政権は発足直後の日米開戦回避努力を重ねたが1941. 12. 8開戦の已む無きに至った。

日米開戦後、東条首相は内務相・軍需省・陸相・参謀総長等を兼務して独裁的とか全体主義とかファシズムとか評されるが、実態は全ての権限を駆使しても、軍令や資源配分等において海軍をコントロールする事は出来なかった。だが敗戦後は戦争責任の中心人物に位置付けられたが、天皇の責任を回避しながらも自らの責任を回避することは無かった。米国における大統領への権力の一元化と軍令に対する陸海軍への徹底した分権とは対照的

であったと言える。正に戦争という国家の危機で、明治憲法を上手く運用できなかった結果でもあろう。

(3) 孫子の戦争観

孫子は、その冒頭で「兵とは国の大事なり、死生の地、存亡の道、察せざる可からざるなり」と説く。更に「利に非ざれば動かず、得るに非ざれば用いず」、更には「戦勝攻取してその功を修めざるは凶なり」等と述べるが、正に戦いが国益を目的として行われるものだとはっきり述べている。更に戦わずして勝つために平時から五事即ち「道・天・地・将・法」を整えて、「彼我を比べて何れが整っているかを深く考察せよ」と述べている。その比較の要素を「主・将・天地・法令・兵衆・士卒・賞罰」の七計を挙げているが、約2500年前の春秋・戦国時代を背景にしている兵書であることを考えれば、これを現代に当てはめる場合には、何も(五事や七計である必要はないだろう。クラウゼヴィッツは戦争論に於いて「軍事は政治に従属するものであり、戦争とは外交の延長である」とも述べている。

国家の危機で

(4) 戦後の問題への対応

戦争は起こさないことが最善であるが、決して敗けてはならない。その為には、その和えが必要なはずであるが、戦後は、「軍事は悪、安全保障は米国頼り」、「基本的人権」への過剰意識が蔓延した。その事が、「こちらから手を出さない限り、戦争なんて起きないし、攻めて来る敵なんて居ない、国連が有るじゃないか、話し合えば分かる、外交で決着すれば良い」等と実に非現実的な不都合が余りにも定着し過ぎた。そして、国を貶めるような国会議員もウヨウヨ居るような現状である。「原発や食品等の安全には『青天井』を求めるが、国の安全には『能天気』となり」、「不都合が生じれば、自分の責任や義務は『忘却の彼方へ』、全ては『国が悪い・社会が悪い・学校が悪い』となる」と、権利の主張と言論の自由をかざす。だが、そうは甘くないのが歴史であり現実である。自らの国は自ら守るという自主独立の基本的精神を堅持しながら、「持てる国」と「持たざる国」が共通の価値観や目標を追求するために「集団安全保障体制」と「態勢」を維持しながら、『国造りと人創り』を進める事が現実的な対応である。

孫子は「用兵の法は、其の来たらざるを待むこと無く、吾の以て待つ有ることを待むなり。其の攻めざるを待む事無く、吾が攻むべからざる所有るを待むなり」(九変篇)で述べているが、「平和憲法を有し、非武装中立政策を掲げる平和愛好国に攻めて来る国などはないという事ではなく、相手が攻めて来れる様な所がない様に自ら備えよ」と言って居るのである。これこそ、『戦わずして勝つ』という孫子の神髄であり本質である。

5. おわりに

(1) 小泉元首相の「原発ゼロ」発言は違和感

小泉元首相は最近「原発ゼロ」を論じた。残念ながら鳩山元総理と相通じる理屈ではな

かろうか。仮に、遠い将来へ向けた可能性で論じるのであれば決して否定出来る理屈ではないが、見通せる期間を想定すると共に、世界の動きを見定めた全体論で言えば「部分と全体を見誤るリーダーでは無い」と信じていたが故に、違和感どころか理解に苦しむ次第である。

ところで著者は、文明評論家の山崎正和氏の「1989年のベルリンの壁崩壊後の世界は、『国民国家の成立以前の状態、又はその成立当初の粗野な姿に逆行してしまった』。それまで、東西対立が『世界全体を凍結してしまったために、皮肉にも日本人には奇妙な傍観者の安心感を与え、自国が外交上の禁治産者の地位に置かれている事実を忘れさせてくれていた』状況が変わってしまった」。を引用され、「その様が変わってしまった世界では、8月15日を『戦没者を追悼し平和を祈念する日』と認識しているのが**我が国だけだという現実を直視することが、我が国が周辺諸国と良好な関係を築いていくために必要な一歩**といえよう。あの戦争は、米国にとっては民主主義を守った輝かしい第二次世界大戦の一部であり、中国にとっては今日の共産党の国家統治を基礎づける重要な歴史であり、韓国にとっては『日帝三十六年の支配』から独立を回復した『光復節』なのである」と述べておられる。朝鮮半島だけでも観れば、半島の人達は、「果して清国や露国からの脅威に対して自らの血をどれだけ流したと言えるのだろうか」「どの国の人達が北からの脅威に血を流して備えたのか」？歴史は明らかである。然しながら、歴史認識という観点から見れば、著者は「自国の歴史認識を米国や周辺国の物差しで測ることが正しい歴史認識である」と言われて居る様でならない。これこそ正に『**自虐史観**』そのものではないだろうか。冷戦時代、国防に任じていた一人として言わせてもらうならば、『奇妙な傍観者の安心感を与えられていたどころか、北に向けた守りに必死であった』こと、『ベルリンの崩壊後も我が国周辺の冷戦が終わらないだけでなく、新たな冷戦状態が生まれた』と感じている筆者に対しては、著者の真意を理解できない愚劣であったならば深謝させていただきたい。

(2) 国益を左右する歴史観考

歴史認識は国家の数だけ、民族の数だけ、或いは極端に言うならば、個々人の数だけ異なる運命にあることは否めない。著者の歴史観は著者の物であるが、それが果たして日本人共通の歴史観であると言えるのだろうか。「毛沢東は日本軍の御陰で中華人民共和国の建設が出来た」という趣旨の感謝の気持ちを我が国の政治家に述べている。嘘つき大国と自らのメディアが明かす韓国の国内でも、真逆の評価をしている勇氣ある知識人達も少なくないと聴く。アメリカが行った原爆投下や無差別爆撃等はアメリカ国内でも評価が分かれているのが実態である。極東軍事裁判では「でっち上げられた」とも言える「南京虐殺」は原爆やB29による大空襲の罪を覆い隠す狙いが有ったとも考えられる。勿論、部分肯定や部分否定で決して全てを評価するつもりはないが、戦後は余りに「弱い者いじめ」を基に準備された歴史観が「弱い者に定着」、しそのままそれを信じてきた結果であると感じてならない。現にこれまでの非公開資料の公開も進んでいる。新たな証言も出てきている。これ等を含めた「飽くなき学び」を続けながら、カーレントな動きを加えながら、これ等が如何なる意味を有するのか等を分析し、その結果を賢く使用して政治や教育等に導入して行かなければ、健全な日本を取

り戻すことは出来ないだろう。

8月15日は確かに日本軍が停戦命令を出して戦闘を止めさせた日である。ソ連軍の侵入でその後も戦闘は続いたが、正確には終戦(敗戦)の日は1945年9月2日の降伏文書に署名した日であろう。だが、8月15日は天皇陛下の御聖断と終戦の詔勅により、『日本人の多くが悔しい思いをしてそれを堪えた日』であることは間違いない。勿論、終戦を一面ホッとした気持ちで迎えた日本人が少なくなかったことは十分推測できる。或いは、敗戦そのものを『喜んだ』少数の日本人は居たかもしれない。だが、8月15日を直接戦場で戦った軍人のみならず民間人を多く含む『戦没者』を追悼し平和を祈念する日と認識することが、**我が国だけだと『何故』言えるのだろうか。否、我が国だけで何が不自然なのだろうか。**その様に認識する日本人が多数いるということも『現実』ではないのか。中国の軍拡及び恫喝、北朝鮮からの核脅威、言われ無き韓国からの虚構の悪意に満ちた挑戦等を含む厳しい国際環境下において、その現実を直視して二度と戦争を起こさない『**覚悟と備え**』をすることこそ現実的な対応ではないだろうか。 おわり